

お札といえば「すかし」。お札の「すかし」はい

現行の日本銀行券には、偽造防止策の1つとして「すかし」が施されています。「すかし」は、紙の厚さを部分的に薄くする「白すかし」と、逆に部分的に厚くする「黒すかし」があり、日本銀行券には、この両者を組み合わせた精巧な「白黒すかし」が使われています。手抄き和紙の伝統技術に支えられたわが国のすき入れ技術は、濃淡の差がシャープで立体感があり、世界ナンバーワンと言われている。



E一万円券のすかし

「すかし」の技術は古く、中国では10世紀から、ヨーロッパでは12世紀から、わが国でも15世紀から存在していたとされています。

もっとも、「すかし」がお札に使用されるようになったのは17世紀からと言われており、例えば、スウェーデンのストックホルム銀行（1661年に世界で最初の銀行券を発行）が1666年に発行した銀行券に、「BANCO」の文字がすき入れられています。

「白すかし」は、便箋などにも使われていますが、「黒すかし」は、わが国では「すき入れ紙製造取締法」によってその製造が規制されています（政府以外は作ることが出来ません）。

では、わが国で「すかし」がお札に登場したのはいつ頃だったのでしょうか？

江戸時代中期頃に発行された藩札の一部や、為替会社（殖産興業政策の一環として1869年〈明治2年〉に設置された金融機関）が発行した紙幣には、簡単な文字や模様がすき入れられていました。また、1882年（明治15年）に発行された「神功皇后像」の「改造紙幣五円券」（政府紙幣）には、トンボと桜花が「白すかし」ですき入れられています。



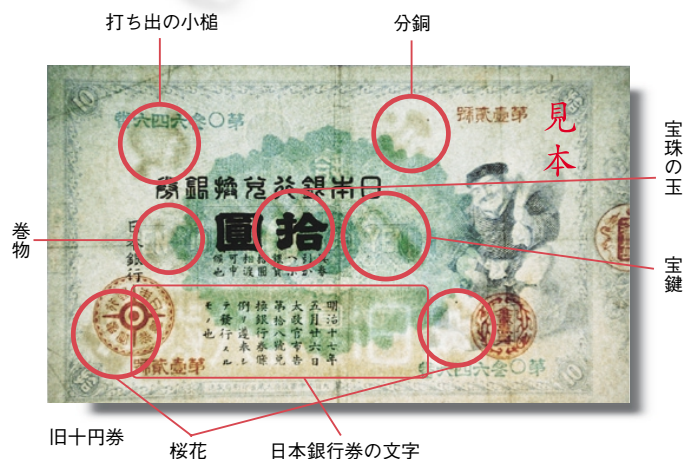
改造紙幣五円券

つから使われている？

— すかしの登場 —

ところで、日本銀行券の場合はどうだったのでしょうか？

日本銀行券の「すかし」は、最初の日本銀行券、つまり1885年（明治18年）に発行された「旧十円券」（通称「大黒札」）から採用されています。この銀行券には、「黒すかし」で分銅や打ち出の小槌、巻物などが、「白黒すかし」で日本銀行券の文字と桜花がすき入れられています。それ以降、日本銀行券には、戦後間もなく発行された「A十円券」、「A五円券」、「A一円券」、「A十銭券」、「A五銭券」の5種類を除き、ほぼ一貫して「すかし」が使われています。



コラム

お札の表に印刷されているアルファベットと数字は何？

このアルファベットと数字は「記番号」と言います。現在発行されているお札は、アラビア数字6桁の数字を挟んでアルファベット24文字が、頭に1ないし2文字、末尾に1文字組み合わせられていて、「A123456B」や「CD77777E」というように表されています。アルファベットは全部で26文字ありますが、I（アイ）とO（オー）は数字の1と0に間違いやすいために使われていません。数字は、「000001」から「900000」までの90万記号が使われています。

これらの組み合わせにより、記番号は、129億6千万枚で一巡します。なお、一巡後は記番号の色を変えて表示されます。

